

一

次の傍線部①～⑦のカタカナを漢字に直しなさい。また、傍線部⑧～⑩の漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ① 切手をシユウシユウしている。
- ② ショウサイに調査する。
- ③ さまざまな要素をモリ込む。
- ④ 魚をレイゾウコで保管する。
- ⑤ 予算をサクゲンする。
- ⑥ おつりの百円コウカが足りない。
- ⑦ せっかくの貯金をロウヒしてしまった。
- ⑧ 遠大な計画を企てる。
- ⑨ 心の中は空虚だった。
- ⑩ カーブで警笛を鳴らす。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問題作成の都合上、改変した箇所があります。)

現状では、公共性の高い場面で分かりにくい外来語が無造作に多用され、必要な情報の共有や円滑なコミュニケーションに支障が生じています。現代の日本語について、多くの人に共通した素朴な印象として、外来語の氾濫^{はんらん}ということがあります。「氾濫」という言葉が使われていることも分かるように、ここには、外来語が一定の限度や許容量を超えてあふれ出し、結果として好ましくない状況を招いているといった危機意識が感じられま

す。

河川が氾濫すれば、国土やそこに住む人々に被害が及びますが、それと同様に、外来語の氾濫は日本語それ自体や日本語を使う人たちに何らかの被害を及ぼします。ここで、日本語そのものに被害が及ぶと考えるのか、それとも日本語を使う人たちに被害が及ぶと考えるのかによって、同じく外来語の氾濫と言っても、とらえ方には違いが出てきます。

日本語そのものに被害が及ぶと考えることには、日本語が長い歴史の中に培ってきた良き言葉と文化的伝統とが、二つながら崩されていくような危機感が含まれています。一方、日本語を使う人たちに被害が及ぶと考えることには、一般の人々になじみのない外来語が世の中に出回ることによって、日常生活を営む上で必要とされる大切な情報のやり取りや意思の疎通に支障が生ずるといった、言葉の機能不全に対する危惧^{きぐ}が含まれています。

二つのとらえ方のうち、どちらを強く意識するかは、人によって違いがあるようです。言葉に対する態度として、日本語そのものへの危機感が先行するタイプの人は、過去からの「①」の立場に傾いていると言えます。一方、日本語による情報のやり取りや意思疎通の面での危惧が先行するタイプの人は、同時代に生きている人と人とのコミュニケーションにまず目が向き、今現在の「②」の立場に傾いていると言えます。

外来語の氾濫に対する態度として、大きく「伝統重視」と「機能重視」の二つの立場があることを確認しました。二つの立場は、必ずしも水と

(③) のように互いに排斥しあう性質のものではありません。あくまでもどちらの側面を重視するかということです。大切なのは、問題になっている状況を的確に把握して、それに応じて、広い視野から適切な判断を下し、柔軟な対応ができるということです。

さて、ここで改めて外来語の氾濫について考えてみましょう。現代社会に生きる私たちにとって、差し迫った問題として緊急に対応しなければなら

ないのは、どちらの側面にかかわる事柄でしょうか。恐らく多くの人が、一般の人々になじみのない外来語が世の中に出回ることによって、日常生活を営む上で必要とされる大切な情報のやり取りや意思の疎通に支障が生じていることを、優先的に解決すべき課題として選ぶのではないのでしょうか。

国立国語研究所の『外来語』言い換え提案——分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫——」は、同時代に生きている人とのコミュニケーションにこのような支障が生じている現状を、そのまま放置すべきではないという基本的な認識に立っています。ですから、これは「④」の立場からの提案であると言えます。「言い換え提案」と言うと、外来語であればとにかくなんでも言い換えてしまおうとする運動のように聞こえるかもしれませんが、決してそのようなものではありません。現状において見過ごすべきではない外来語の問題を、まずはこれだと見定めて、適切な対応策を考えているわけです。

私たちは、一人一人が、大きく分ければ「公的な世界」と「私的な世界」の二つの世界に生きています。そして、この二つの世界をきちんと区別することは、現代社会の基本ルールの一つです。

ところで、言葉は社会を維持するための根幹となるものですから、この二つの世界の区別は、そのままそれぞれにふさわしい言葉遣いの区別につながっています。特に公的な世界にふさわしい言葉遣いは、大勢の人が参加する上で、きわめて重要な役割を果たしています。冒頭に述べた「公共性の高い場面」というのは、このような公的な世界の一つ一つの場面であり、そこではそれにふさわしい言葉遣いが求められます。

それでは、公共性の高い場面にふさわしい言葉遣いとは、端的に言ってどんなものでしょうか。現代社会の目指すところが、社会の「民主的な運営」であるとなれば、その前提として、構成員の一人一人が、社会参加に必要な情報を共有している必要があります。そのためには、「だれもが分かる言葉」を皆が使う」ということが、どうしても欠かせません。専門家同士や仲間内でしか通じない言葉遣いは、無意識のうちに多くの人を排除してしまうからです。

現代社会において、国の省庁の行政白書、自治体の広報紙、新聞の三つは、公共性の高い場面に属する情報媒体の代表的なものです。これらで使われる言葉が分かりにくいとしたら、それは社会の運営にとって深刻な問題であるはずですが、しかし、現状ではそういう認識が必ずしも十分であるとは思えません。

基本的に、⑥「独り善がりの言葉遣いは、公共性とは相いれないものです。話し言葉であれ、書き言葉であれ、情報の送り手には、絶えず「受け手への配慮」が求められています。そのような受け手への配慮が、逆に公共性を保証していると言ってもいいでしょう。公共的なコミュニケーションの基本が受け手への配慮であり、その配慮が「分かりやすい言葉遣いの工夫」に自然に結び付いていく、そんな好循環を生み出すことができれば、社会の運営は一步も二歩も前進するはずです。

⑧ここで、具体的な話題に移りましょう。国民各層から無作為に抽出して行った「外来語に関する意識調査」⑨では、「外来語、略語の意味が分からずに困った経験の有無」について尋ねています。国民全体を見ると、困ったことが「しばしばある」「時々ある」という回答の合計が、ほぼ5人中の4人（77・7%）に達しています。また、男女問わず、この傾向は高年齢層、特に50代で目立ち、60代以上では「しばしばある」という回答が突出

● 外 来 語 言 い 換 え 提 案 (抜粋)

外 来 語	解 像 度		言 い 換 え 語
	国民全体	60 歳以上	
< ⑩ >	●●●●	●●●●	・手当て ・介護
ガイドライン	●●●○	●●●○	・< ⑪ > ・運用指針
アクセス	●●●○	●●●○	・< ⑫ > ・接近
イニシアチブ	●●○○	●●○○	・< ⑬ > ・発議
< ⑭ >	●●○○	●●○○	・地球規模 ・前地球的
< ⑮ >	●○○○	●○○○	・技術革新 ・刷新

理解度を4段階に分け、国民全体と60歳以上とを区別し、○●を用いて示しています

●理解している ○理解していない

- 75%以上
- 50%～75%
- 25%～50%
- 25%未満

しています。

ふだんの言語生活を振り返って、これだけ多くの人が外来語や略語に対する困惑を表明しているという事実は無視できません。何らかの対応策を講じる必要があることを強く示唆しています。(中略)

一口に分かりにくい外来語と言っても、個々の外来語にはそれぞれに背景や事情があり、一律に扱えるわけではありません。それぞれの特性を検討して、言い換え語を採用するのが良いのか、あるいは外来語に説明を付け加えるのが良いのか、一つ一つ対応を考える必要があります。(中略)

以上のように、一般になじみのない分かりにくい外来語は、何らかの工夫をして分かりにくさを解消する努力をする必要があります。外来語は、使
い方次第で毒にも(16)にもなります。毒にならないようにうまい付き合い方を考えて、工夫することが賢明な道ではないでしょうか。

(相澤正夫『外来語と現代社会』)

問一 [1]・[2]・[4] にあてはまる最も適当な言葉をそれぞれ文章中から漢字四字で抜き出して答えなさい。同じ言葉を二回用
いてもかまいません。

問二 (3)・(16) にあてはまる最も適当な言葉を漢字一字で答えなさい。

問三 傍線部⑤ 「そのようなもの」の指示する内容を文章中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部⑥ 「独り善がりの言葉遣い」と同じ意味で使われている言葉を、文章中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 傍線部⑦ 「前進」・⑧ 「具体的」の反意語をそれぞれ漢字で答えなさい。

問六 傍線部⑨「無作為に抽出して」の意味として最も適当なものを次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

- (ア) 合理的に手を加えることなく良いものを抜き出して
- (イ) 意図的に手を加え都合の良いものを抜き出して
- (ウ) 意図的に手を加えることなく抜き出して
- (エ) 合理的に手を加え都合の悪いものは抜き出さなくて

問七 へ⑩ へ⑮に当てはまる最も適当な言葉を次の(ア)～(コ)の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|-----|----------|-----|-----|-----|---------|-----|-----|-----|-------|
| (ア) | アミューズメント | (イ) | ケア | (ウ) | イノベーション | (エ) | スキル | (オ) | グローバル |
| (カ) | 主導権 | (キ) | 手引き | (ク) | 境界線 | (ケ) | 成功 | (コ) | 交通手段 |

問八 この文章の内容に合わないものを次の(ア)～(オ)の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- (ア) 外来語が氾濫していて、60代以上の人たちは「外来語言い換え運動」に賛成している。
- (イ) 外来語の氾濫は、日本語やそれを使う人たちに何らかの被害を及ぼしている。
- (ウ) 外来語の意味が分からず困った経験は全世代にあるという事実は看過できない。
- (エ) 外来語が氾濫しているが、国民は努力をして外来語をすべて理解するべきである。
- (オ) 民主的な社会を運営するためには、誰もが分かる言葉が不可欠である。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

通夜の夜、一通り弔問客が帰った後の部屋は静かだった。

冬子は、畳の上の布団に横たわっている父の亡骸をぼんやりと見つめていた。

「雪、降ってきたみたいね……」

客を送り戻ってきた兄嫁が言った。

「……義父さん、雪好きだったから……きつと喜んでるわ」

そう言いながら、隣の客間でテーブルの上の片づけをする兄嫁に、

「あ、義姉さん、あたしやるから」

「いいのよ、冬ちゃん。久しぶりなんだから、ゆっくりお別れしてあげて……じっくり顔見たいだろうから……」

「今さらあたしの顔見たって喜ばないわよ、この人……」

冬子は薄く笑いながら言った。

兄嫁は、それには答えず黙って片づけを続けた。

部屋には、線香の匂いとは別に、馴染みのある実家の匂いがしている。

*

冬子がこの家を出て、三年の月日が過ぎていた。

父が倒れたという知らせを聞いてからも、病院に一度、見舞に行ったきりだった。

冬子が病室の入口に立つと、ベッドの上の父はちらりとこちらを見たが、すぐに再び天井の方へ向き直り、目を閉じた。

それきり、何も話さなかった。

間に立たされた兄嫁が、冬子に目で合図をしたが、冬子もまた、父に声を掛けることをしなかった。

「……子供みたい」

冬子は聞こえるか聞こえないかの声で呟いた。父は動かない。

「ママ……」

春子が冬子の手をギュッと掴んだ。

左手にはいつもの人形を抱き、右手は冬子の手を握りしめている。

⑤ 父は春子の声に、少し反応したようにも見えた。それでもこちらを向くことはなかった。

……子供みたい。

とは、自分に向けた言葉でもあった。

父はきつと、春子の成長した姿を見たいだろう。そう思って、春子を連れてここへ来たはずなのに。

春子は八歳になっていた。

「……ママ……帰ろう……」

⑥ 三年会わなかったただけだが、時間と病は、父の風貌を ⑦ 変えてしまっていた。冬子ですら病室に入った瞬間、父を見違えた。

⑧ 幼い春子が、父を見て、かつてのお祖父ちゃんじいとわからなくても無理はないかもしれない。

ベッドの上の老人を春子は恐れているようだった。

五歳まで一緒に住み、自分を可愛がってくれた優しいお祖父ちゃんじいのイメージと重ならないのかもしれない。

*

母と早く死に別れ、父は男手一つで冬子と兄を育てた。男親であるが故に気が回らない部分もあり、冬子は寂しい思いをしたこともある。

⑨ 無骨な人であった父は、戸惑いながら恐る恐る冬子を育てた。兄には気安く言えることも、娘には気を使い、ぎこちなくなるのを冬子の側も感じながら育った。

そのぶん、冬子も父に物を言えないところがあった。母親と選んだという、友達の着ている洋服が羨ましくて、一人で泣いたこともあった。それでも、駄々をこねて父を困らせた記憶はない。父の選ぶ服はいつも、少し ⑩ で、時代遅れのようにもあったが、冬子にはよく似合った。でもたまには、少し似合わなくても、女同士で騒ぎながら選んだような、 ⑪ な服も着てみたい。そう思うこともあった。

春子が生まれてから、父は春子に ⑫ な服ばかりを買ってきた。冬子から見るとそれは、どこかトンチンカンで間が抜けていた。しかし、幼い春子は冬子の選ぶ ⑬ な服を嫌い、父の選んだ服の方を着たがった。

冬子はそれが、父が、自分を育て直しているように思えて癩しやだった。

春子が、父の反対を押し切ってシングルマザーの道を選んだ自分にならないようにと。

大らかで明るく、誰にでも可愛がられるように、無邪気に育つようにと。

春子は、父に甘えるだけ甘え、父も春子を手放しで可愛がった。

……着せ替え人形みたい。

父の買った服を着てはしゃぐ春子を見てそう思った。

あの時、子供を生んで自分一人で育てる、という冬子の決断を、父は否定した。

「お前はそれでいいかもしれないが、子供はどうなる。どれほど寂しい思いをするか……」

「片親の寂しさは、わたしが一番わかっているわ」

言っただけで後悔したが遅かった。

「……それほど寂しくもなかったけど」

と言いつつ足してみたが、父はただ黙っていた。

……勝手にしろ。

と、その背中には言っていた。

強がってみたものの、生んでしまえば、結局父に頼って暮らしている自分も嫌だった。

そんな自分の気持ちに気づいていないような顔で、春子を可愛がる父の態度も堪^{たま}らなかった。

父は、春子で自分を育て直している。

それが、今までの自分を否定されているようで嫌だった。

……でも。

と、冬子は思った。

自分もまた、春子を一人で育てること、父のやってきたことをやり直そうとしているのかもしれない。

一人で育てたって、自分のような子にはしないと。

自分も同じように、父の目の前で父を否定しようとしているのかもしれない。

いや、そのつもりはなかったが、おそらく父はそう感じていた^⑭だろう。

登録していた会社から知らせがきて、派遣の仕事先が決まったタイミングで、冬子は春子連れて、父の家を出た。

「そんなフワフワした状態でやっていけるのか」

父はそう言ったが、止めはしなかった。

……やっていける。いや、やっていくしかない。

あの時冬子には、他の道は選べなかった。

*

それ以来、冬子の足は実家から遠のいた。

傷つけない、は言い訳で、傷つきたくない、が本当だった。それは自分が一番よく知っていた。

父が入院し、もう長くなさそうだと聞いた時、傷ついてもいいから春子をもう一度父に会わせようと病院に来た。

そのはずなのに。

ただ天井を見つめたまま何も言わない父を、子供みたいと感じながら、その父に言葉を掛けない自分も、また子供みたいだと、冬子は感じた。

¹⁵「……ねえ、ママ……帰ろうよ……」

「……うん。じゃあお祖父ちゃんにバイバイ言って」

春子は、人形の手を持って振り、小さな声で、

「……バイバイ……」

と言った。

以来、次の時は……と思いつつも、グズグズしているうちに、病は早く進み、あつげなく父は逝った。

(太田光『マボロシの鳥』)

問一 傍線部①・②・③は、誰ですか。次の(ア)～(エ)の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(ア) 冬子 (イ) 兄嫁 (ウ) 春子 (エ) 父

問二 傍線部④「目で合図をした」とありますが、どういう意味の合図ですか。文章中の言葉を使って答えなさい。

問三 傍線部⑤「……子供みたい」とありますが、誰のどのような行動ですか。文章中の言葉を使って答えなさい。

問四 ⑥ ⑨ にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-------|-----|---|------|---|-----|---|------|
| (ア) ⑥ | わずか | ⑦ | 少し | ⑧ | その上 | ⑨ | 元来 |
| (イ) ⑥ | たまに | ⑦ | まったく | ⑧ | さらに | ⑨ | もとより |
| (ウ) ⑥ | たった | ⑦ | すっかり | ⑧ | まして | ⑨ | もともと |
| (エ) ⑥ | ほんの | ⑦ | ぜんぜん | ⑧ | わずか | ⑨ | ずばり |

問五 (⑩) (⑬) にあてはまる言葉の組み合わせとして正しいものを次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | |
|-------|----|---|----|---|----|---|----|
| (ア) ⑩ | 派手 | ⑪ | 派手 | ⑫ | 派手 | ⑬ | 地味 |
| (イ) ⑩ | 地味 | ⑪ | 地味 | ⑫ | 派手 | ⑬ | 派手 |
| (ウ) ⑩ | 地味 | ⑪ | 派手 | ⑫ | 派手 | ⑬ | 地味 |
| (エ) ⑩ | 地味 | ⑪ | 派手 | ⑫ | 派手 | ⑬ | 派手 |

問六 傍線部⑭「そう感じていた」とありますが「そう」の指示する内容を答えなさい。

問七 傍線部⑮「……ねえ、ママ……帰ろうよ……」とありますが、なぜ、春子はそう言ったと冬子は思ったのですか。文章中の言葉を使って答えな

さい。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日すでに暮れかかるほどに、利根川のほとり、ふさといふ所につく。この川にて鮭※あじろの網代といふものをたくみて、武江の市にひしかけて、江戸の市場で売さぐものあり。よひのほど、その漁家に入りてやすらふ。夜のやどなまぐさし。月くまなくはれけるままに、夜舟さしだして鹿島にいたる。

ひるよりあめしきりにふりて、月見るべくもあらず。ふもとに、根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、この所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りてふしぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけむ、しばらく清浄の心を得るに似たり。あかつ⑤

きの空、いささかはれけるを、和尚起こしおどろかし侍れば、人々起き出でぬ。月のひかり、あめの音、ただあはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はるばると月見にきたるかひなきこそほ⑦ぬなきわぎなれ。かの何がしの女す⑧

ら、郭公の歌、え詠までかへりわづらひしも、ほととぎす我ためにはよき荷担の人ならむかし。よい味方という人らしい。

和尚

をりをりに かはらぬ空の 月かげも ⑩ ちぢのながめは 雲のまにまに ⑪ さまざまな眺めとなるのは雲の変化によるものである

月はやし ⑫ こずゑは雨を 持ちながら 桃青

⑬ (松尾芭蕉『鹿島紀行』)

※ ふさ…… 布佐（千葉県我孫子市）

※ 網代…… 魚を捕らえる装置

問一 傍線部①「よひ」・⑦「ほゐ」・⑩「をりをり」・⑫「こずゑ」を、現代仮名遣いに直しなさい。

問二 傍線部②「月くまなくはれけるままに」・③「月見るべくもあらず」・⑤「あかつきの空」・⑨「え詠まで」の現代語訳として、最も適当なものを次の（ア）～（エ）の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

② 月くまなくはれけるままに

- （ア）月がとつぜんに晴れわたったので
- （イ）月がかげもなく晴れわたったので
- （ウ）月の光がないのに晴れわたったので
- （エ）月が趣なく晴れわたったので

③ 月見るべくもあらず

- （ア）十五夜の名月を見るようにできていない
- （イ）十五夜の名月は見ないようにしよう
- （ウ）十五夜の名月は見ることができない
- （エ）十五夜の名月を見ようとは思わない

⑤ あかつきの空

- （ア）明け方の空
- （イ）夕方の空
- （ウ）昼間の空
- （エ）夜中の空

⑨ え詠まで

- （ア）詠めといわれたので
- （イ）詠めてしまったので
- （ウ）詠もうとしたので
- （エ）詠むことができないので

問三 傍線部④・⑥・⑩の「ぬ」の中で意味が違うのはどれですか。記号で答えなさい。

問四 傍線部⑧「かの何がしの女」とは、清少納言のことです。清少納言の作品名を漢字で答えなさい。

問五 傍線部⑬の作品を、次の(ア)～(エ)の中から選び、記号で答えなさい。

(ア) 柿食えば 鐘がなるなり 法隆寺

(イ) 菜の花や 月は東に 日は西に

(ウ) 雀の子 そのけそこのけ お馬が通る

(エ) 五月雨を あつめて早し 最上川